

広島俳句倶楽部

令和六年十一月作品集

広島市中区河原町 知佳子

河原町に暮らして三十年以上経った。少しずつ町に慣れ、知り合いも増えた。ビルが多い町だが、思いがけない所に自然が残る。町の人も、自然や草木を大切にしている。近所のスーパーの買い物や、用事での外出の時に知り合いに出会ったり「団栗がまつたよ」「紅葉が始まつたよ」などと教えてくれる。そんなささやかな日常が、かけがえない宝物だ。

実を付けしままの枝落ち野分晴

花カンナ空き家に残るオートバイ

玻璃越しに挨拶交はし赤まんま

螢草抜かれしままに咲いてをり

園児らに手を振り返し秋の空

星の名を話しつつ行く秋の夜

公孫樹の実あらかた落ちて雨上がる

黄葉のはじまる辺り雀来る

鯉釣を二三歩離れ見てゐたり

鳥のごとくつぎつぎ散つて柿紅葉

《作品鑑賞》

あざみ

知佳子さんのお住まいは街中でありながら昔ながらの温かい付き合いがあり、情緒あるお暮らしのようです。平素よく川沿いを散歩されているのでしょうか、どの句も女らしい感性をこたわりなく詠まれ、詩的な世界です。そして、どの句にも色合いがはつきり浮かび、心に沁みました。

実を付けしままの枝落ち野分晴

吹きすさぶ台風の過ぎ去った後の光景は、物さびしさと哀愁がしみじみうかがえます。

園児らに手を振り返し秋の空

高い空の爽やかな中、園児とのやり取りに知佳子さんの温かさがあり、ほほえましいです。

鳥のごとくつぎつぎ散つて柿紅葉

鳥のごとくと柿紅葉の取合せ、足もとに降る鳥のごとくの比喻、落ちるさまの侘しさが感じられ、上手な表現です。とてもよい勉強をさせて頂きました。

どの谷の奥の奥にも稲咲かせ

難所へと刈られし笹に露の置く

沢蟹の打たれし杉の枝を這ひ

足をまた逃げて行き秋の蛇

茶屋の跡けふも人來ぬ紅葉かな

晩秋の風に立ちたる峠かな

地の神の前冷やかに川流る

爽籟の国分尼寺となりけり

金堂のあたり最も鶉騒ぐ

秋川を離れて古墳へと歩く

初秋のひと日厨を吹きよぐる

茶室への道のあちこち萩こぼれ

眠らずに居てほんによき虫の声

秋霖に濡れてひととき樹下に居り

世話をする人なき庭の秋桜

草臥れて足さすりをり秋の夕

稽田によく日の差して峽の里

近う来て吾を追ひぬき秋苗

後の月ひとり夕餉を終へてより

天心に昇れば晴れて後の月

目を病みてぼんやり見ゆる揚羽蝶

しばらくは昼の虫聞く食後かな

秋の蚊を大声出して追ひにけり

山の木の紅葉したと友の文

鈴物を軒下に入れ冬支度

集まれば昭和生まれや温め酒

散り敷ける山茶花の道体操へ

石踏の花やさしきかなと友の言ふ

リハビリの手休め仰ぐ冬の月

水槽へ目高沈むや寒き夜

佐保光俊

高尾ひとみ

あざみ

鵲日和日陰の石に座りたる

丈低き草の多くて鵲の声

高台より海と山見る秋の昼

鳥声の重なり合うて秋ぐもり

秋冷の鳥の鳴く道一步づつ

目の覚めて鳥声のする秋日和

目の前に来ては向うへ秋の蜂

駄菓子屋に時計見て入る鰯雲

色変へぬ松校門に傾ぎたり

長き夜のインコ突然羽ばたけり

亜矢

瀬戸内の日の当たりたる檸檬かな

夢叶ふひと如何ばかり鰯雲

酢橘の香本家は遠くなりけり

面接の稽古する子や虫の夜

子の閑く合格通知金木犀

太鼓練り歩けば飛んで稲雀

お代わり可社員食堂栗御飯

介護する身とさるる身と星月夜

家仕舞最後の柿をいただきぬ

村雨に木犀ほろと零れけり

綾乃

コスモスや土手に鴉の鳴き頻る

コスモスの咲き継ぐ路地の飯屋かな

信子を映す川面や虫の夜

畔板に止まつてゐたり赤とんぼ

十月の日曜市でピアス買ふ

川音の中に一輪曼珠沙華

秋澄むや伊吹山はすこし雲を生み

船の音湖心へ行くか霧の朝

人知れず銀杏落つる明樂寺

秋高し遠く見下ろす余呉湖かな

井藤希

名を知らぬ鳥の声して秋うらら

藤袴アサギマダラの舞ひ降るる

ころころと転がり落ちて沢の栗

訪ね行く滝の紅葉に日のあたり

いつの間に時の過ぎゆく紅葉かな

柚子しぼり潮汁へと垂らしたる

夜をへして母は綿入れ縫うてくれ

石路の花庭のいつもの片隅に

石路の花海風の吹くこの庭に

勤め終へ玄関の灯に石路の花

大畑恵

冠木門くぐれば匂ふ菊花展

弥山嶺は雲に覆はれ冬隣

冬に入ることさら青き瀬戸の海

谷道の細りて落葉しきりなる

綿虫の飛びるる露地に日向あり

枯草を焚けば寄り来る二三人

冬の港電車はすぐに引き返し

伊予見んと立つ頂の小春風

帰り花高速船は沖へ消え

山家の灯はやも消えたり冬銀河

暁子

芋掘ると聞いていそいそ生家へと

仕事場の愚痴言ふ吾子と栗を剥く

物を干し終へて一息菊月夜

歌うたひ体揺すれば月揺るる

小鳥来て実と糞零す大樹かな

裏隣鉄鳴らして秋手入れ

秋雨に庭師は仕事切り上ぐる

生家へと隧道できて深む秋

屋子で呼ぶ村の生家や山粧ふ

比婆山の道に散り敷く冬紅葉

すみれ

猫じやらし茎折らぬやう落けてをり

国道に渋滞の煮く秋の空

霧晴れて湖全面の現はるる

誰となく一部屋に寄る夜寒かな

目の前のカフェに灯の点く冬の朝

猫の居て世間話の小春かな

葡萄枯れ裏窓ひとつ現はるる

横歩きして茶の花の道に入る

寒鴉鳴き合ふ道を急ぎたり

根元より真つ直ぐ倒れ枯芒

故郷の真つ青な空曼珠沙華

子の時からいつもここには曼珠沙華

突然に赤子は泣いて曼珠沙華

子と孫と一枚の田の稲を刈る

去年より子は手際よく稲を刈り

晩稲刈り終へて皆で帰りけり

子供神輿母の施設の前に揉む

車止め神輿過ぐるを待つてをり

夜神樂の大太鼓はや囀こえくる

神樂舞ふそばに幼子眠りをり

と志さんの茄子の煮びたし食べたき日

まだ小さき零余子は取らぬことにして

零余子飯作るに足らぬ零余子かな

コスモスや中山道の曲り角

路地を行く旅の楽しみ秋深し

鮎鮎に地酒樂しむ旅の夜

灯台へ道細くなる水引草

鳥影に煙立ちたる秋の暮

秋の夜の紅茶に落とすブランデー

夫とする死後の話や秋深し

知佳子

ちどり

辻純江

秋の旅友の秀句の話して

鮎鮎に話題沸騰酒美味し

子の写真整理叶はず虫時雨

虫の音を小窓に聞いて湯に浸る

濡れ縁に寝そべる猫に桐一景

景の上の最期の飛蝗そつと撫づ

安芸に住み秋天の下小富士見る

吾子帰る秋夕焼に染まりつつ

文化の日良き句に唸る句会かな

暁の庭掃く音の冴えてをり

雲雀

強風の寒夜提灯の子カチカ

夜半の冬電飾にじむ傘の街

寄鍋のスープを飲んで一休み

蒸饅頭けつこうひだの美しき

夕時雨歩き走って売り切れて

電飾の夜市に並ぶ極月や

街灯の線を浮かべる冬の川

火の番や席が空くまで待つ時間

お団子は大か小かの師走なり

見物のはずが声とぶ年の市

ふじ女

藻の花や川は橋より向きを変へ

梅花藻の花を挟める流れかな

秋しぐれ座して観音拝みけり

街道は二つに分かれ薄紅葉

山頂の雲のちぎれて空高し

秋惜しむ滋賀大生と合唱し

乱れ萩揺れて黄イ蝶ひるがへる

芭蕉葉の吹かるる音に振り返り

バス停に紫山子の座る過疎の村

ペンションはまだ先芒野を歩く

松田裕子

親子鹿公孫樹落葉を踏み行けり

鶉が羽を広ぐる波止の冬灯

枝先に梅花空木の帰り花

沼療終へ帰りし庭に杜鵑草

まづスープ蓮華で啜る霜夜かな

お隣は夫婦で散歩小春かな

着ぐるみを見る子どもたち息白し

冬の月天心にある夜明かな

足早になりたる冬の家路かな

湯豆腐を取分け母に持ちゆけり

村上正人

傘の骨折られ煽られ野分中

鳴り響く村のサイレン秋出水

刈り残す畑の葎や蓼の花

威嚇せる鎌は動かずいばむしり

流星や施設の兄を訪ふ夕べ

落暉なほ色を留めて曼殊沙華

伏す君へ朝の光や蟬蛸鳴く

黄落の坂を下れば村見ゆる

ふるさとは美味き空気の刈田かな

宿に沿ひ湧水に映え薄紅葉

森口良樹

色変へぬ松の小径を石棺へ

竹藪に沿うて流るる桐一葉

雲間から出さうで見えず後の月

牛小屋の裏を溝蕎麦覆ひけり

団欒にすぐにみてたる拔菜かな

畑の芥袋に詰めて秋収

雀立つ川の中州の草紅葉

秋冷の石畳行くハイヒール

空つばの貨車の荷台へ初時雨

山野ウタ

ゆるやかにコスモスの花揺れにけり

垣根越し隣の石榴眺めをり

キャンバスを立てて紅葉を描きをり

高速のバスから見ゆる秋景色

秋祭笛や太鼓が鳴り響き

吊し柿朝日に種が透けて見え

河原静子

恋をする人の横顔柳散る

父の通夜卓に置かるる蜜柑かな

庭の菊活けて父への手向けかな

散らぬまま白山茶花のよごれけり

散り咲いて山茶花の時長きこと

生まれ来る子を待ちて還る毛糸玉

桑門わかこ

黄落に朝日きらきらきらと

低山に雲の懸かりて冬に入る

冬日和博物館へと上野まで

引き立ての大根見せ合ふ小学生

路地裏に亥の子の唄の響きをり

落葉踏む音だけ聞こえ朝の道

撫子

山茶花の小さき蕾のびつしりと

奥能登の海辺の宿の虎落笛

明星と月の並びて冬夕焼

アラジンの熱き舞台や冬の星

冬どるる積ん読の人今は亡き

大原良子

冬の朝吳線に見る牡蠣筏

足を止め大橋に見る冬銀河

御講風茶碗を水で濯ぎたり

冬枯の野山に鳥の声のして

寒鴉誰かの荷物見てをりぬ

上島康子

秋の蝶もつれながらに舞うてをり

玄関の花に添へ置く石榴かな

山茶花の散り敷く道を散歩せり

帰り花五輪開ける寺苑かな

小春日を愛ほしみつとお茶を飲む

紀英子

護衛艦秋の波へと進水す

秋草を活けて朝礼始まりぬ

野の花を挿して月見の整へり

夜なべして時計の振り子よく聞こゆ

秋惜しむ薄茶の碗を置いてより

高梨英子

見上ぐれば銀木犀や古道行く

秋高し迷うてみたき古道かな

千歩行く旧街道や秋の雲

秋雨や小さく琵琶湖見えてをり

山粧ふ車中に尽きぬ話して

土肥律子

冬に入り洗濯物の早仕舞

風吹けば落葉の小山移動せる

三輪車止めて遊ぶ子小春風

鍋焼を子と三人でふうふうす

セーターを編んでは解く手の遅さ

みさ子

頭上から鴉の落とす石榴かな

息のこぼ草墓所の脇を猫通る

数珠玉を景の皿に乗せおままごと

後の月雲間に見えて団子食ふ

夕暮の取る人のなき柿たわわ

なつ

ジヨギングの靴紐締めて末の秋

照景道下つた先に海開け

愛犬といつもの道を冬の朝

落景掃き足元に舞ふ今朝の庭

菰卷の松の高くて縮景園

美耶

父の忌の法話に落穂食みしこと

借り傘にふたり入りて紅葉狩

劇場へ歩く道筋秋の薔薇

文化の日書肆の看板下ろされし

高嶋朝代

冬支度ラジオに歌を流しゐて

早々とばつさりと切る桔芙蓉

年ごとに力んでよる枯景道

堀川の小舟に揺られ石路の花

やす保

二番果の玉蜀黍や髭を付け

窓越しの初冬の日差し受けにけり

冬の午後両腕で押す車椅子

民

路地の先白き木槿の咲き誇る

木々に吹く風音を聞き美術展

団栗が小さき手より零れ落つ

古川廣子

令和六年十月度作品集より

井藤希 私の選んだ十句

秋の山みな峙ちて伯耆かな
 峡の田に畑に釣瓶落しかな
 無花果の皮剥く十指汚しつ
 病むひとの窓に至るや秋の蝶
 ころ柿に陰りの早き峡住ひ
 菊酒や夜間飛行の灯が過る
 水引の小花付きたる客の靴
 鰐飛んで飛んで川面を遡る
 手のひらにレモンの香り残りたる
 露草やなつかしき夢見るやうな

佐保光俊
 高尾ひとみ
 亜矢
 綾乃
 曉子
 辻純江
 村上正人
 森口良樹
 河原静子
 なつ

ちどり 私の選んだ十句

伯耆へと秋の日を受け九十九折
 月草に昨夜の雨かや玉となり
 湯浴みして耳傾くる虫の声
 モーソアルト流しひとりの秋の昼
 無花果を残して鳥を待つてをり
 残菊の咲いて山家のとびとびに
 団栗を踏みつつ登る古戦場
 子が発ちし部屋之机に月明り
 敗戦日父はぼそりと友の事
 灯を消して月下美人の咲くを待つ

佐保光俊
 高尾ひとみ
 あざみ
 亜矢
 大畑恵
 曉子
 知佳子
 雲雀
 松田裕子
 高嶋絹代